

国語の読む力を育てる

物語の「自力読みの力」をつけよう

子どもたちに、物語を自ら読み進める力をつけさせたい。こんな願いをかなえる方法を、二瓶弘行先生に伺いました。小学校六年間を通じて身につけるべき、物語の自力読みの力をつける授業実践を「かさこじぞう」を例にご紹介いただきます。

物語は場面からできている

ありとあらゆる物語は「場面」からできています。物語を読むときには、この場面意識をもたせる必要があります。

低学年段階から、「場面」＝物語をつくる、小さなまとまりとして、時（いつ）・場（どこ）・人物（だれ）の三観点から場面を分けさせます。

場面は、紙芝居の絵を思い浮かべると、理解しやすいですから、「このお話を紙芝居にすると、何枚の絵が必要かな？」と問いかけ、場面分けをさせるとスムーズです（資料①）。

しかし低学年の子どもたち全員が、はじめから妥当な場面分けができるはずはありません。

中心場面を意識して読む

じっくりと書かれている言葉を検討させ、「時・場・人物」に着目させていくことが大切です。

二年生の教材である『かさこじぞう』を、わたしは四年生の物語単元に入る前の学習材としても使います。三年生までに子どもたちがどんな学習をしてきているかということをもっと押さえるため、「場面はいくつか」という課題を、子どもたちが「時・場・人物」で検討できるかどうかを確かめます。

さらに中学年では、この七つの場面がただ順番に並んでいるのではなく、七つの場面のどれかが「最も大切な中心場面」であることを指導します。

◆「中心場面」の定義

物語全体を通して、あることが最も大きく変わる場面。「あること」は、多くの物語の場合は、「中心人物の心」。

また、中学年段階では、登場する人物の中でも、特に大切な存在である「中心人物」を意識しつつ読ませる必要があります。

◆「中心人物」の定義

物語全体を通して、気持ちやその変化がいちばん詳しく描かれる人物。

本作品『かさこじぞう』の中心人物は、「じいさま」となるでしょう。また、この「じいさま」と深くかかわる存在として登場する「ばあさま」を「重要人物」として押さえることも読みのポイントとなります。

資料①

- 『かさこじぞう』の小さな場面構成
- ◆第一場面
むかしむかし――
「場面分けの根拠Ⅱいつ（時）」
 - ◆第二場面
ある年の大みそか――
「場面分けの根拠Ⅱいつ（時）」
 - ◆第三場面
町には大年の市が立っていて――
「場面分けの根拠Ⅱどこ（場）」
 - ◆第四場面
じいさまは、とんぼりとんぼり町を出て――
「場面分けの根拠Ⅱいつ（時）」
 - ◆第五場面
「場面分けの根拠Ⅱどこ（場）」
 - ◆第六場面
すると、真夜中ごろ――
「場面分けの根拠Ⅱいつ（時）」
 - ◆第七場面
じいさまとばあさまは、よいお正月を――
「場面分けの根拠Ⅱいつ（時）」

〈教材の出典〉いわさき きょうこ作「かさこじぞう」東京書籍「新しい国語」平成23年度 2年下

「前ばなし」・「あとばなし」に着目する

四年生であれば、「前ばなし」「あとばなし」についても教えています。特に、「第一場面は典型的な「大きな設定場面」であるため、強調して指導します。

「お話」のいちばん最初の場面には、その「お話」のおおもとになる「いつ・どこ・だれ」が紹介されます。この場面的ことを「前ばなし」と呼びます。『かさこじぞう』の第一場面も、とても大切な前ばなしです。

『かさこじぞう』の「前ばなし」（第一場面）

むかしむかし、あるところに、じいさまとばあさまがいました。たいそうびんぼうで、その日その日をやっとくらしておりました。

- 「いつ」 むかしむかし（時）
 - 「どこ」 あるところに（場）
 - 「だれ」 たいそうびんぼうなじいさま・ばあさま（人物）
- 「前ばなし」のある物語は、「あとばなし」も大切にしないといけません。

『かさこじぞう』の「あとばなし」（第七場面）

じいさまとばあさまは、よいお正月をむかえることができました。

最後のたった一文だけれども、出来事が終わったその後の様子が描かれています。これは「あとばなし」の性格であり、物語における役割となっていることを押さえておきます。

クライマックス場面に着目する

高学年になったら、『かさこじぞう』を使って、さらにもう一つ「物語は大きく変わる場面をもっている」ことを教えます。この物語で「最も大きく変わったこととは何なのか」「それは、どこで変わったのか」と振り返ってみるのです。そして「それは、どのように変わったのか」「それは、どうして変わったのか」をも意識していきます。この「何が最も大きく変わる」場面的ことを、わたしの国語教室では「クライマックス場面」と読んでいます。

「クライマックス」という学習用語を使って物語の授業展開をしている実践の多くは「最も心がドキドキするところ」「最も出来事が盛り上がるところ」「いちばん重要な場面」などと、とらえ方がさまざまで、明らかではありません。

わたしは「クライマックス場面」をとらえることこそが、物語の全体構造を把握することだと考えています。よって、わたしの国語教室での定義は「あることが最も大きく変わる場面」です。この「あること」というのは、多くの場合、中心人物の「心」を指します。

この「心」に、「」がついているのは、単に悲しかった気持ちや嬉しくなるような、気持ちや感情レベルの変化だけでなく、考え方や生き方・価値観・思想、こういったものもこの場面で変わる必要があるからです。

クライマックス場面を把握したうえで、以下のことが、その後の詳細な読みの核となります。○物語で「最も大きく変わったこと」

- ①それは、何か。

- ②それは、どのように変わったか。
 - ③それは、どうして変わったか。
- この「最も大きく変わったこと」の検討は、物語全体を深く読み返し、出来事の流れを明確に押さえつつ、人物の行動や心情、人物関係の変容を読み取らなければなりません。

物語を「四つの基本場面」でとらえる

高学年でクライマックス場面を学習するに際して、基本的な物語の構造として、「四つの基本場面」と「六つの一文」を指導しておく必要があります。

物語の「四つの基本場面」

- ① 大きな設定場面
〈設定〉（前ばなし）
- ② 出来事の展開場面〈展開〉
- ③ クライマックス場面〈山場〉
- ④ その後場面
〈結末〉（あとばなし）

六つの一文

- ① 冒頭
- ② 出来事の始まり
- ③ クライマックス場面の始まり
- ④ クライマックス
- ⑤ 出来事の終わり
- ⑥ 結び



筑波大学附属小学校教諭
二瓶 弘行

にへい ひろゆき*1957年新潟県生まれ。早稲田大学第一文学部卒業。新潟県内の公立小学校に勤務。その後、上越教育大学大学院の修士課程を修了。1994年から現職。立教大学兼任講師、全国国語授業研究会理事、国語教室ネットワーク「ひろがれ国語」代表。隔月刊誌「基幹学力の授業 国語&算数」（明治図書）国語編集長。『夢』の国語教室創造記「いまを生きるあなたへ贈る詩50」「二瓶弘行の国語授業のつくり方」（東洋館出版）、『二瓶弘行の説明文一日講座』（文芸堂）など著書多数。

基本的な物語の構造では、まず、「①大きな設定場面」をもちます。ここで、物語全体にかかわる「②の大きな設定・時・場・人物」が説明されます。

続く一文で、「②出来事の展開場面」に入っていきます。「ある（時の表現）」という典型的な出来事の始まりです。

「ある年の大みそか、じいさまはためいきをつけて言いました。」この後、出来事はいくつもの小さな場面によって展開していきます。

資料②

『かきこじぞう』の

「出来事の展開場面」

「出来事の展開場面①」

○ばあさまと一緒にこえたかさを、じいさまは正月のもちこを買うために町に売りに出かける。

「出来事の展開場面②」

○じいさまは、町の大年の市で必死に売ろうとしたが、かさはまったく売れず、がっかりして帰る。

「出来事の展開場面③」

○日が暮れた帰り道、じいさまは、ふぶきの野原で寒そうにしている六人のじぞうさまに出会い、かわいそうに思っにかさをかぶせてあげる。

「出来事の展開場面④」

○家へ戻ったじいさまの話聞いたばあさまは喜び、二人は楽しそうにもちつきまねをした後、眠りにつく。

いさまのやさしさを読み取った子どもたちにわたしは言います。確かにじいさまはやさしい。けれど、そのやさしさはそんなに特別なことなのかな？ それくらい

のやさしさは当然のやさしさなんじゃないの？ かさをあげたことは、真夜中にどつさり食べ物を持って帰るほどのやさしさではないんじゃない？

「じいさまにあげたかさは、どこにもあるかさとは違う。家で待つばあさまの気持ちもこもっているかさでしょ。そのかさをじぞうさまにあげたから、じいさまはやさしいと思う。」

「じいさまの持っていたかさは五つ、じぞうさまは六人。一人分足りない、とわかったじいさまは、自分の手ぬぐいまで脱いで、じぞうさまにかぶせてあげているんですよ。ここにもじいさまのやさしさが出ていますと思う。」

なるほどわかった、とわたしは笑顔でうなずき、そして三たび子どもたちに問うのです。じいさまのやさしさはわかったよ。でも、じぞうさまはどつして「ばあさまのうちはどこだ」とばあさまにも感謝をしよう

このような四つの小さな場面により、『かきこじぞう』の「出来事の展開場面」は構成され（資料②）、最も重要な場面である「③クライマックス場面」を迎えます。そして、「④その後場面」をもちます。

四つの基本場面を押さえ、さらに六つの一文を検討して、全体構造を構造曲線（クライマックスを頂点とした一本の線）で表します（資料③）。

クライマックス場面から全体をとらえ直す

たいそうまずしくてその日その日をやつと暮らしていたじいさまとばあさまが、よいお正月を迎えることができ物語が終わります。どうして、じいさまとばあさまはそんなに大きく変わる事ができたのでしょうか。

この問いこそが単元の核となる中心話題だ、とわたしは教材解釈しています。

「クライマックス場面」で何が最も大きく変わったかを知るには、「前ばなし」に描かれていることが、「あとばなし」でどのよ

うに大きく変わっているのかを読み直します。

この『かきこじぞう』では、じいさまとばあさまの生活、置かれている状況が、暗から明へと転換しています。

大きく変わった場面こそが「クライマックス場面」であるところから考えます。変わるのほましく、じぞうさまが「じいさま」とそりを引いてやってくる第六場面。恩返しなのか、おほめなのかはわからないが、この真夜中の場面がクライマックス場面です。

中心人物「じいさま」の心の最も大きな変容から考えても、クライマックス場面はこの場面になるでしょう。

何のために「クライマックス場面」の検討をするのか。それは、まさしく物語の読みの中心となる場面だからです。どうしてじぞうさまたちは、もちなどをたくさん積んだそりを引いてやってきたの？

この発問によって、子どもたちは物語全体をくわしく読むという場に立たされます。そして、第四場面のじいさまの言動に着

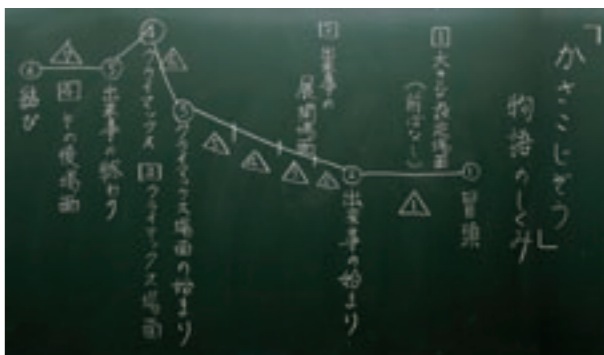
る。そういう前向きな二人だからこそ、じぞうさまは『じいさま』とやさしいやさしとやってきたんじゃないのかな

「作品の心」を受け取るために

クライマックス場面を意識し、懸命に読み取ろうとする過程で、見えてくるのが「作品の心」だと子どもに教えます。クライマックス場面に読みの中心を置き、物語を読み直すことによって「作品の心」を確かに受け取ることができるのです。

こうした「自らの力で物語を読み進める」＝「自力読みの学習過程」を、六年間を通して子どもたちに教えていこう、というのがわたしの主張です。

「どうしてじぞうさまはやってきたんだろう」という問いについての対話を成立させるためには、どうしても第二場面を読ませておかなければなりません。そして、第三場面、声をほり上げてかさを売るじいさまの様子を読ませます。第四場面の吹雪の夜を読ませ、さらに第五場面のじいさまとばあさまの様子



資料③

目します。『じいさまは、じぞうさまたちにやさしくするでしょう？』だから、その恩返しに正月の食べ物を持って帰ったの」

その第四場面の「やさしさ」を理由とする意見に対して、わたしはさらに問いかけます。『じいさまの』やさしさは、第四場面などの言葉からわかるの？

子どもたちは、ここで改めて深く言葉を検討することになります。場面の様子を想像し、人物の会話文や行動の描写から、その気持ちを読み取ろうとするのです。懸命に言葉を読み、じ

をしつかり読ませる必要があります。すべてがクライマックスの第六場面につながるのですから。場面ごとを大切に、順番に読み進めることも大事ですが、それをずつとやっていったのでは、子どもも疲れてしまいます。

「クライマックス場面」で最も変わることは何だろう、そして、どうして変わったのだろうと意識することで、読解の授業は子どもにとって主体的なものとなります。この問いこそが、子ども読みの読みを変えるのです。

作品が自分に最も強く語りかけてくること、それが「作品の心」です。そして「自分はこういうふうに『作品の心』を受け取ったよ」と言えるようになるには、物語を読む過程を教える必要があります。

二瓶先生の物語授業へのノウハウが満載！

具体的な授業実践が盛り込まれた「物語読解一日講座」



B5変型判 128ページ
二瓶弘行著（文漢堂）
定価1,680円